

京都大学	博士（教育学）	氏名	西村 拓生
論文題目	「美と教育」という謎 —プリズムとしてのシラー『美育書簡』—		
（論文内容の要旨） 本論文は、シラーの『人間の美的教育に関する一連の書簡』（『美育書簡』）の解釈史の検討を通じて、美・芸術・美的なものの教育的人間形成的な意義について原理的に考察したものである。 序章と第1章において著者は考察のための理論的構えを明確にする。序章では、著者自身のシラー研究の地平を明らかにするため、教育哲学界における「美と教育」をめぐる議題を再検討する。そこにポストモダニズムを背景とする美的なものに対するポジティブな期待と批判的なまなざしとの複雑な交差を見いだす。さらに第1章では、テキストの前提的な理解のために、シラーの生涯と著作歴における『美育書簡』の位置を確認した上で、第1書簡から第27書簡までの各書簡の議論を要約し、著作全体の構造の暫定的な見取り図を示したうえで、従来の解釈の論点をも整理する。 第2章以下では、シラー解釈史において重要な論者たちの「美と教育」をめぐる議論を順次検討する。第2章では、カッシーラーの芸術教育論とその基調をなしているシラー論を検討する。カッシーラーはシラーにとっては美も道徳も人間精神の自発性の等しく根源的で独自の表現であったと考える。しかし、この方向を突き詰めていくと議論はそのように割り切ることができないことが明らかになる。 そのときに問題となるのが、「美的仮象」と「現実」や「真理」との関係である。シラーにとって、仮象の世界は人間の自由の所以であったが、他方でシラーは美的仮象と現実や真理との峻別を説いている。この仮象の存在論的地位をどのように理解したらよいのか。第3章では、シラーの仮象論に対する典型的な解釈をしているガダマーを、さらにガダマーの先行者としてのニーチェを取りあげこの問題を検討する。 仮象の自由の果てに、それを限界づける他者や外部が問われるという議論の構図は、人間にとって現実や世界の美的・感性的な構成を制約するものは何かという問題を提起する。「美的なもの」の社会的・政治的な意義や可能性をいかに捉えることができるのかを問うため、第4章ではマルクス主義の系譜につながる一連の思想家たち、ルカチ・イーグルトン・マルクーゼ・ハーバーマスのシラー論を検討する。 「美しい仮象の国」が、現実と切り離されるという意味での「仮象」的ユートピアでないとしたら、その現実的可能性はいかに理解され展望されるのか。本論文の後半ではその可能性をめぐって3人の思想家を取りあげ検討する。第5章では、ハーバーマスがあらためて詳細に検討される。ハーバーマスは『美育書簡』に、「近代というプロジェクト」を擁護する自らの立場を重ねあわせ、さらに「コミュニケーション的理性」の概念をも読み込む。ハーバーマスは、コミュニケーションの理念と「仮象としての美」との同型性を見だし、それによって可能になる生活世界の再統合こそが「美しい仮象の国」の実現であると考えた。 第6章では、「自由への教育」を志向するヴァルドルフ教育のシュタイナーのシラー論を検討する。「自由」の真の意味と可能性を指し示しているという意味でシラーは重要な思想的源泉であった。シュタイナーは、「自由」の実現のためには、シラーと同様、人間の「共同の生」のあり方が問われねばならないと考え、「社会有機体三分節化」論を提起した。そこにシラーの「美しい仮象の国」の一つの具体的で包括的な実現可能性を見ることができる。 第7章では、京都学派の教育学者木村素衛のシラー論を検討した。木村は、美にお			

いて人間性を全一的に生きることが、絶対無としての場所にあって感性的なものも理性的なものも人間の全ての働きを包越し絶対的に肯定することを意味している、と考えた。来るべき人間や社会のあり方を展望するハーバーマスやシュタイナーに対して、木村のシラー解釈は、私たちの日常的な生の「今、ここ」に「美しい仮象の国」を見るものである。

終章では、この思想史研究が教育学にとっていかなる意味をもつのか明らかにしている。シラー解釈を通じて論じられた美的なものの可能性は、教育現実そのものを変更させる「語り直し」の拠り所を与える。世界を「美」として体験し得るということが、私たちが自らと他者を「よりよい」生へと促す教育という営みの根底をなしているという。『美育書簡』はこのような教育の根底をめぐる思索として読むことができる。

(論文審査の結果の要旨)

フリードリッヒ・シラーの『美育書簡』は、美的教育論の古典として今日でも高く評価されている一方で、難解な著作としても有名であり、その難解さの理由の探究も含めてこれまでさまざまな読解の試みがなされてきた。そのアポリアの一つが、シラーのテキストの始めにおいては美的国家が道徳的国家への過程として論じられていたものが、最後にはそれ自体が目的であるかのように論じられていることである。このアポリアとつながって、「美的なものと道徳」、「仮象と現実」、「美と崇高」といった問題系が変奏として生みだされてきた。西村氏は、この著作の解釈を困難にしてきたテキスト内での「屈折あるいは矛盾・分裂」そのものが、近代における美と教育との関係を捉える上での重要な事柄を指し示しているのではないかという仮説を立てる。

本論文は、その仮説のもと、シラーの「真意」を探究するという従来の思想史解釈の課題設定を転換し、『美育書簡』が一義的な解釈を容易に赦さず、それ故に多様な読解を促してきたこと自体を積極的に評価するという立場から、代表的な哲学者たちの多様な『美育書簡』解釈を丹念に跡づけ、相互を位置づけることによって、美と教育との関係を、豊かであるとともに危うさを孕んだものとして、その重層性と複雑性を保持したまま、明晰さをもって提示しようとした試み、斬新で野心的なシラー研究である。そのような試みを、著者は『美育書簡』をプリズムとして析出された美と教育の錯綜した関係のスペクトルとして描き出す試みと表現している。

著者が選択したシラーの解釈者たちとは、カッシーラー、ガダマー、ニーチェ、リオタール、ルカーチ、マルクーゼ、イーグルトン、ハーバーマス、シュタイナー、木村素衛らである。もとよりこのような思想家の選択自体に、著者の並々ならぬ学識の深さと鋭敏な研究戦略を読み取ることができる。著者は、各論者たちの『美育書簡』にかかわるテキストを綿密にかつ詳細に検討しながら、それがどのように解釈されてきたのかを解明し、論者たちの間の解釈の差異を明確に取りだして見せる。しかし、それ以上に重要なことは、それぞれの論者たちの美と教育についての思考が、深まることによってかえって図式的一義的に整理することが困難な論点につきあたり、再び美と教育をめぐるアポリアへと逢着してしまうことを、適切な引用をもって描きだして見せるところにある。

ここには弁証法のように対立する理論が高次に統一される様な爽快さはない。むしろ著者は、このような「屈折あるいは矛盾・分裂」こそが、現代を生きる私たちにとっての美と教育の関係を正確に示していることを繰り返し指摘する。そしてそのような認識を踏まえた上で、それでもなお著者は美的な生の肯定と否定、憧憬と懐疑の逆説的なダイナミズムを自覚的に生き続けることのうちに、私たちが美的に生きていくことの可能性がありうることを指し示している。

「真意」を求める従来のシラー研究の設定を転換して「屈折」から『美育書簡』解釈史を捉え直すという卓越した問題設定、『美育書簡』の構成についての先行研究を踏まえての優れた解釈、『美育書簡』に関わる論者とテキストの的確な選定、またそのテキストの綿密な読解を通して実現された各論者の明快な思想解釈、そのような一連の考察を経ることによってはじめて可能となった『美育書簡』の新たな意味づけ、そしてシラー思想研究の可能性の提示、そのどれをとってもシラーの『美育書簡』の教育学研究に新たな次元をもたらしたものとして、高く評価することができる。

もちろんこのような研究にも問題と課題がないわけではない。キーワードである *ästhetisch* は文脈において「美的」と「感性的」の両方の使い分けがなされているが、論文の用語法においてこの二重性・両義性そのものをより活用できるようにはできなかったか等が問われた。しかしこうした指摘された問題は本論文の価値を損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和元年9月5日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降